

「化粧・美容の変遷とルッキズムの現在」

本稿は「化粧・美容の変遷とルッキズムの現在」をテーマに、化粧や美容が単なる個人の嗜好や自由な選択というだけでなく、社会構造や価値観と深く結びついた文化的行為であることを明らかにすることを目的とする。まず、ルッキズム（外見至上主義）の概念とその成立過程を整理し、外見による評価や差別が社会の中でどのように正当化されてきたのかを検討した。次に、日本における化粧文化の歴史的変遷をたどり、古代の呪術的意味をもつ化粧から、近代以降の身だしなみやマナーとしての化粧へと役割が変化してきたことを示した。さらに、SNSの普及によって現代の美意識が画一化され、比較や自己管理の圧力が強化されている現状を分析した。加えて、化粧・美容の低年齢化、醜形恐怖症や整形依存、制度としてのルッキズムといった具体的事例を通して、外見を重視する社会が個人に与える影響を考察した。

以上を踏まえ、化粧は「個人の自由」であると同時に、社会的規範に規定された行為であり、「綺麗になりたい」という欲望自体が社会構造の中で形成されていることを指摘した。最終的に、多様な美のあり方を受容する社会への転換と、外見による評価に依存しない価値基準の必要性を論じた。

フォントサイズ：タイトルのみ 18pt、その他 10.5～11pt

和文フォント：MS 明朝

欧文フォント：Times New Roman